



Vdumchivyi 34 号航海記 (I)

—IWC/IDCRによる南氷洋

ミンククジラの国際資源調査—

鯨類研究所 加 藤 秀 弘

はじめに

Good experience という一言におだてられとうとうソ連捕鯨船にただ一人乗り込むはめになった。1980年10月のことである。ソ連の船には前々から興味もあり、現在対象としているミンククジラの調査でもあり、また最大理由としては鯨へ足をつつ込むきっかけとなった IDCR (International Decade of Cetacean Research, 国際鯨類調査10カ年計画) というプログラムに1978年以来参加しているためであった。目ざす海域は南氷洋第V区 (ヒゲ鯨海区), 大半がロス海によって占められている。氷の状況さえよければロス氷の根元までいける。ホエールベイにも行けるだろう。そんな思いが脳裡をかすめる。しかし同時に全く言葉もわからぬ異国の船に1人でほうりだされ、いったいどうなるんだろうかとまた考え込む (結局英語はほとんど通ぜず大変な苦勞となったが詳細は後述)。しかし、もう後へも引けず兎に角乗ることになった。

さて本論に入る前に、この調査とその背景について若干の説明をしておく必要がある。鯨類 (特に大型) の資源量推定については現在に至るまで、国際捕鯨委

員会 (以下 IWC とする) の科学委員会が大きな役割をはたして来ていることはいうまでもない。従ってここから幾つかの資源量推定法とその管理理論も生まれて来ている。その主力となったのは、漁獲物から得られる生物学的データや CPU E を用いた資源モデルであった。最近でも主なものをあげると Doi のモデル (CPU E は用いない), Baleen モデル, Beddington と Cook のモデルなど著しい発展を見せている。しかしながらこれらモデルにも幾つかの問題点があり、現実の鯨資源の状態をどこまで再現できるかという点については未だ解決したとはいえない。

一方これらモデルと独立した方法として目視観察と標識再捕による直接的な推定法が近年注目を浴びてきている。特に目視の方法論については1980年9月にシアトルでそのデザインに関する特別会合まで持たれ、理論的にも著しい発展をみせている。目視による資源量 (個体数) 推定は一般的に line-transect と呼ばれる方法に従うことになる。詳しい記述は本稿の範囲を越えるので簡略に説明すると、まず観察者 (船) が一定の速度で走航する時、line 上にある対象物 (鯨) が 100% (あるいはある比率、最近では一応 83% とされ

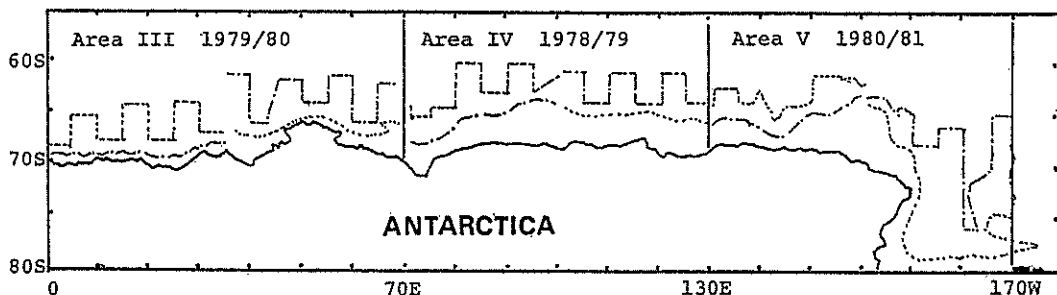


図1 南氷洋ミンク鯨国際資源調査における1978/79漁期から1980/81漁期までの調査海域と航跡。

ている)発見できるものとし、コースラインからはずれている対象物の発見(確)率は、コースラインからのずれの距離(発見角と発見距離によって算出する)の関数として減少する。つまりコースラインからずれる程発見率は一定に下るとみなし、そして観察努力量から観察範囲内(採集範囲)の密度を求め、観察範囲外部へ外挿する方法である。したがって現場においては、目視観察といってもかなりの精度のデータが必要となってくる。なお方法論について幾つか問題があるが、それについては機会を改めたい。また標識再捕法は漁獲物に含まれる標識鰹の割合から推定するものであるがこれについては後述する。

さてIWCの科学委員会はこの2つの方法に注目し、その実施の必要性を認め、大規模なかつ組織的な調査を計画した。1978年の年次会議では南水洋ミンククジラを対象にこの調査を実施することを取り決め、翌漁期(1978/79漁期)より調査が開始された。調査の立案計画に協力されたのは、P・ベスト博士(南ア)、大隅清治博士(日本)、M・テイルマン博士(アメリカ)およびIWC事務局長のR・キャンベル博士らであった。この調査はIWCの調査計画であるIDCRの一環として取り行なわれる事になり(現在ではIDCRはこの調査の代名詞にまでなっており以下この航海を単にIDCRと記す)、質的にも規模的にも以前に比べ真の意味での国際プロジェクトとなった。調査は1978/79漁期に南水洋第IV区(70°E~130°E; 調査団長、P・ベスト—南ア)、1979/80漁期に第III区(0°~70°E; 調査団長、J・ホーウッド—英国)、そして本航海記の舞台となった1980/81漁期に第V区(130°E~170°W; 調査団長、P・ベスト—南ア)においていずれも高緯度の流水域(氷縁海域)付近で各々約2カ月間にわたり実施された。図1に調査海域とコースを簡単に示してある。この間7カ国より延べ21人が調査員として参加しており、使用した船舶は700トン級の捕鯨船型調査船で2回目までは2隻、3回目には3隻であった。

この調査の大きな特色としては、従来までの調査資料が捕鯨船団に従属していたのに比べ、調査船が全く独立して運行されたという点がまずあげられる。簡単なことの様であるが遠い南水洋海域でこの様な方式はなかなか実現できなかったのである。そして目視調査においては、1隻が氷縁沿いを調査し他隻は沖合上をグリッド状に走航することによって調査海域の拡大と密度の変化を観察した。また前述のごとく、あくまでも資源量推定が目的であるので、調査にかかわる全ての点でstanderizeされている。例えば探鯨努力量につ

いては、探鯨(観察)中、対象物確認中、追尾中などははっきりと区別して、その都度ポジション、コース、スピードと併に記録される。探鯨中のスピードその他のアクティビティの変化が記録されるのはいうまでもなく、できる限り正確な努力量が算出される様に心がけられている。また発見角については色々な方法が試みられているがこれも船の転針等を利用してできるかぎり細く測定しており、距離にいたっては発見時の船位から出現場所までの接近に要した時間と速度によって算出するのである。その他群構成、体長組成、船に対する鯨の反応など30項目にわたるデータが発見時に必要となる。沖合の密度が低い海域ならまだしも、氷縁の高密度海域では発見があい次ぎまさに戦場となる。この様な時、例えばある発見に対し接近中、追尾中に他の発見があった時などは二次発見と呼ばれるものになり、資源量推定には原則として用いない。その他見張所(トップ)の観察者数、双眼鏡の首振りの状態なども考慮されつつあり、現状としては可能な限りの事を行っている。

標識調査に際しては毎年共に該当海区内(一応一つの系統群として認識しておく)においてはできるだけランダムにかつ集中してマーキングを行い、調査期間中とその後一定期間内は調査海域内でいかなる捕獲操業も行わず、しかるべき後に入域して操業をこれもまたできるだけランダムに行った。また日ソ両母船上での鯨体処理過程における標識鰹の見落し率についても実験が行われ、特に日本船団では丁寧な鯨肉処理と金属探知器の導入によってほぼ100%の回収が実証されている。

前置きが長くなった。さて著者は北大大学院学生の時に1978/79の調査に参加する機会を得て以後、鯨研にお世話になってからもこの調査に連続して参加させていただいている。初年度には遠洋水研(現南西水研)の正木博士と共に1978年10月20日、北太平洋・赤道海域で目視標識調査(遠水研の調査プログラム)とイルカ捕獲調査を行い(本誌319, 324号参照)、この調査終了後も船に残ってオーストラリア・フリーマントルからIDCRに参加した。後に南水洋で捕鯨母船第3日新丸に洋上転船し、標識回収調査、回収効率実験および主目的である生物調査を行い、さらに南鯨終了後は北太平洋へ向い、これを最後に中断となった第28次北鯨(1979)でマッコウ、ニタリの調査を行い、計212日に及ぶ航海を鯨学事始めとした。順序からしてこれらの航海記から始めるべきであるが、今回は特に興味深いことも多く本項より始めるものとする。因に1980

／81漁期に南氷洋へ出漁した捕鯨船団は日本・第3日新丸、ソ連・ソヴィエトスカヤークライナ号の2船団のみであった。共にミンククジラのみのお業となり、海区割りの不成功からI～IV区の全海区お業となった。両船団共に母船1隻、捕鯨船4隻の規模となり、往年の面影はすでにない。

出発までの事

ケンブリッジでの1980年IWC年次会議科学委員会で1980／81南氷洋漁期においても引きつづきIDCRが行われることが確認され、P・ベスト博士が再びその責任者となった。過去2回についても同様であったが、日本政府は2隻の捕鯨船型調査船とその乗組員を提供することを確約した。また今回からはソ連政府より1隻の調査船提供の申し出があったが、実態は依然として明らかではなかった。しかし兎に角、参加予定の調査船船長を含む調査関係者を集め10月上旬東京に計画会議を開く運びとなった。IDCRに関してはこれより以前、ツアトルの目視に関するデザイン会議においても論議されている。この会議はIWC科学委員会の勧告に基づき各方面の目視理論の専門家を集めて開催されたもので、日本からは東海区水研（当時）土井博士、遠洋水研大隅博士らが出席している。

この会議中最も話題になったのは以下の点と思われる。(1)コースライン上の発見率、(2)調査船に対する鯨の反応、(3)航行速度の発見率に及ぼす影響、(4)氷縁から沖合に至る間の密度の変化状態（外挿する際に必要）。そしてこれらの点につきIDCR航海にて実験を取り行うよう勧告がなされた。これらの実験を簡単に説明すると(1)については発見角の読み取りがおおよそ5°単位程度なので±5°がすべて0°に記録されてしまい、0°発見が極めて多くなってしまいうちに大きな問題がある。そこで発見角15度以下の場合、発見してもすぐに転針せず、そのままコースを保って走行し目標物が15°になった時転針接近し、その後三角測量し発見時点の角度を求めるという方法が考案された（後に実施してみたところ、かなり難しい様に感じられた）。(2)はハプス研究所のレザーウッド氏が1980／81ロシアにおいて米国コーストガードの砕氷船と搭載ヘリコプターを用いて上空より観察する調査プログラムを持っており、その調査と連系することになった。また2隻の船を平行に走航させ、両船にはさまれた部分と外部との比較によって検討するプログラムも考案された。(3)については等密度と思われる海域にてスピードを変化させ同距離を走航、(4)は氷縁から直截に沖合へ

直航する方法が考案された。以上のほかに1隻の日本船では見張所上方にビデオカメラを取り付け双眼鏡の探査範囲と角度毎の集中頻度を調査する実験、そして群の大きさ別の潮吹き間隔の観察が通常の調査に加えられることとなり実に盛り沢山な内容となった。

さて東京準備計画会議はプロジェクトリーダーのP・ベスト博士（水産研究所、南ア）、1979／80航海のタルズリーダーJ・ホーウッド氏（Lowestoft 水産研究所、英国）、M・ティルマン博士（NOAA、米国）そしてI・イバシン博士（VNIRO、ソ連）らを迎え、10月1～4日の間農林水産省三番町分庁舎を議場とし開催された。議事は大隅博士を議長として進行され、具体的調査法その他が論議されることとなった。まず調査船は日本から第27京丸（日本共同捕鯨KK所有、730トン）と第11利丸（同、740トン）が提供されることとなったが、さてソ連の方はといえば前回よりやや具体的になったものの、“Vdumchivyi 34”（以下V34と記す）という船が来るらしいというほかは、トン数その他具体的なことは良くわからない。Vdumchivyiとはいかなる意味かと問えば、イバシン博士は一言“シンク”といった。私はまっ背になった。浮んでいようからsinkとはもう絶望である。外国参加者にも同様に聞いたらしく、みな薄笑いを浮かべている。しかし直ぐにこれは“sink”ではなく“think”という意であることが解り一同ホッとす。ただこの方にしても“考え込む”の意味とも解釈でき、あまりお日出たい印象はなく、なんとなく前途を暗示しているように思われた。以上3隻の調査船に配乗する調査員は以下のとおりである。

27京丸：ベスト*（団長、南ア）、ジョイス**（米）、笠松（日）

11利丸：ツノダ（米）、エンサー**（ニュージー）、宮崎（日）

V34：ヘンブリー*（豪）、ローレット**（米）、ロブニン**（ソ連）
加原（日）

* ベストとヘンブリーは補給時に船を乗り換える。

** 準備会議の時点での氏名は不明であった。

みごとソ連船乗船の栄誉（？）を得たのは、私と同じく第1回目の調査から参加している西オーストラリア博物館のD・ヘンブリー氏とスミソニアン博物館の海鳥研究で有名なワトソン博士の助手をしているR・ローレット氏である。後に彼らとは異国の船で共にしん酸をなめることになる。なお本誌は小型鯨研究である宮崎信之博士（国立科学博物館）も参加することとなったことも付け加えておく。

調査はすでに第V区（130°E～170°W）において実施されることが決まっており、ウエリントンに12月16日出港、12月22～23日に160°E地点に到着し、西向き

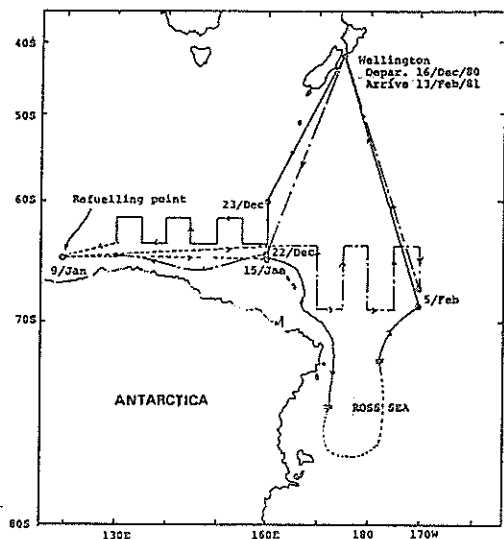


図2 調査予定海域と日程、—は11丸丸、- - -は27京丸の調査コースを示す。V34は前後期ともに氷縁沿を調査することになっている。

に調査しながら翌年1月10日に130°E地点に到達、IV区で3隻共に捕鯨捕獲第3日新丸で燃料と食料を補給また中間ミーティングの後再び160°Eへ引き返し、1月15日にロス海へ突入、2月7日に170°Wで調査を終了、そして2月13日にウエリントン帰港と計画が立てられた(図2参照)。便宜上130°Eから160°Eまでの調査を前半、160°Eから170°Wまでを後半とすると、前半は27京丸、後半を11丸丸が氷縁域を航行することとなった。一方V34は全期間氷縁域を航行することになり、マーキングを主体とする調査になった。これらは過去2回の航海経験に基づく処置であり、特に高密度

海域における目視とマーキングの両立の難しさから氷縁域でのマーキングを全てV34で行うことにしたものである。また後半についていえばほとんど予定がたてられず、すべては氷次第ということになり、柔軟性を持った計画としている。

その他(前述の実験も含む)調査に関する具体案、準備状況などが1つ1つ討議されたが、初参加のソ連の為にかなり細かい所までを対象とした。議長およびベスト博士らが1つ1つソ連側に確認をとったが、彼らは決して“ノープロブレム”とあっさり返答するのが常であった(このノープロブレムは我々の間であらゆる意味で流行語になるのだがここでの説明はさける)。

会議は英文の議事録を作成採択し一応閉幕し、なお討議の足りない部分はウエリントンのプレクルーズミーティングにゆだねるところとなった。さて、これで決めることは一応すべて決ったわけだ出発まであと2カ月程となった。私自身最も恐れるところはソ連船員とのコミュニケーションであった。そこで会議終了後直ちに丸善へ急ぎ外国語会話コーナーの前に立った。大学時の私の第二外国語は独語(これとてもかなりあやしい)であり、ロシア語はスパシーバしか知らない。私は「ロシア語一週間」、「ロシア語ハンドブック」そして「ロシア語—日本語辞典」を買い込み、猛勉強を開始するつもりでいた。しかし、前に立ちはだかるのは難解な文字の列、3日にして「ロシア語一週間」は埃をかぶることとなり、いつの間にか12月となった。増えた語彙はスパシーバの他何語もなかった。私は白だすきを十文字に懸ける様な思いでいよいよ成田を発つことになった。(つづく)

続・北海道で鯨を捕った男の話

—斉藤知一の捕鯨業時代—

中 村 春 江

鯨研通信に表題の文を寄稿してのち、私は石川県内灘町役場を訪問しました。それは斉藤の資料を集めていた昨年9月、北国新聞(本社・金沢市)で「内灘町と北海道羽幌町が姉妹町正式提携」という記事を読み、もしやこの姉妹町提携の素因は、斉藤にかかわり

があるのではなからうかと思ひ、これを確かめたい気持からのことでした。

内灘町役場の総務部長金丸氏から、両町の提携の経緯を聞き、見せていただいた「両町のかかわり」の冒頭に、斉藤知一の名を読んだのでした。金丸氏から

は、斉藤の血筋の方が訪ねてられるとは、思いもかけぬことだったともいわれました。私はこのとき、羽幌町にも行かねば片手落ちになると思い、即座に7月に訪問することを決めたのです。

私の処女地・北海道

実を申しますと、私はいまだに北海道の地を踏んだことがなかったのです。それで鯨研通信339号に載った文を書いているときは、実地を知らぬままに書いているものですから、心もとない気持ちでいっぱいでした。そして斉藤のことを知るほどに、鯨を追った海を見たい気持ちが高まるばかりでした。

7月9～10日の羽幌港・焼尻島往復の航路で、私は羽幌の海を飽くことなく眺めました。そのあと羽幌町役場の総務部長押之見氏に案内されて訪問したのは、斉藤の香典帳に名前のある嶋元四郎右衛門の孫、嶋元正武氏宅でした。私はここで自分の最も知りたいと願っていた、斉藤の捕鯨方法を教わることができたのです。前に書いた文は、斉藤の捕鯨経歴を述べただけのもので、肝心の捕鯨方法は掴みどころのないままに終わってしまいましたが、ここに改めて書くことができずことを嬉しく思います。

以下、嶋元正武氏の談話を要約しながら書いてゆきます。

僕は72歳。ところで僕は7～8歳のころから、ひいばあさん（四郎夫人）や、まごばあさん（四郎右衛門夫人）から聞いた話をよく覚えてます。斉藤知一さんの話もよく聞いています。僕の家は今から4代前、ひいじいさんの四郎が、安政年間から内灘の海で鯨を捕っていたのです。ところが明治に入って、だんだん鯨がいなくなって、20年代近くになると捕れなくなって、それでどうしようかと思っていたとき、土族の斉藤知一さんがやって来て北海道の羽幌で鯨を捕るからというて、うちで使っていた船頭や、若い衆や、舟、網、道具類の一切をまとめて、斉藤さんが引き受けたの、それから羽幌のここに持ってきて、鯨捕りを始めたの、それが羽幌の本当のきりはじめになるのだけれど、そのときまだアイスがいたの、北海道の原住民だね。

ところで四郎じいさんは、斉藤さんが自分の物を全部引き受けて羽幌に行ってしまったが、北海道には、どんな種類の鯨がいるのか、どんな鯨を捕っているのか気が掛かって、舟財船に乗ってはるばる小樽まで出かけてくると、そこから舟を仕立てて羽幌の様子を見に来たの、そのときアイスが鯨をとっているのを「ほ

う、おもしろいな」と目をつけて、斉藤さんの番屋に幾日か知らぬが寝泊りして内灘に帰った。そして翌春か？ 翌々春かに、麻網を作って羽幌に持ってきて鯨を捕ったの、そのころは綿糸なんてない時代で、麻糸で網を作っていた。四郎と四郎右衛門は、その後鯨漁期になると出稼ぎにやってきた。内灘というところは、砂ばかりの土地で、今と違って木はおろか、米も野菜も作れない本当に貧しい村だったから、出稼ぎに出ねば暮らしてゆけぬ所だった。

注 四郎・四郎右衛門父子の羽幌への出稼ぎは、村民の習うところとなり、やがて羽幌に移住する者も多く、内灘・金石出身者は加賀衆と呼ばれるようになる。この人たちと内灘町の人々との交流が盛んなことから、両町姉妹町提携の因となったのです。

斉藤さんは鯨専門で、いくら鯨がいても見向きもせず、鯨捕りの四郎は鯨漁師になってしまった。うちでは四郎右衛門のとき、羽幌に移住したのです。この四郎右衛門は、親の四郎と鯨捕りをしていた明治時代に、九州へ鯨の加工を習いに行っている、長崎あたりへね。

鯨を捕る方法かね。それはね、鯨の親子が泳いでいるでしょう、そこでまず子鯨を攻めるわけさ、子鯨を捕えると親鯨は子鯨のそばから離れないの、それを利用して今度は親鯨を捕ることになる。鯨はね愛情深い動物だから捕えると泣くでしょう、めえんと鳴いたか、うえんと鳴いたか知らないが、親は子を探して自分も捕えられるの、その鳴き声を聞くとかわいそうで鯨捕りは、もう嫌だ、できないと思うそうだよ。しかしそうもいってはいられない。まず網を張る、そして鯨の頭に網がひっかかると逃げるでしょう、そうすると網が、ところどころ切れるようになっていて、鯨は網をかぶったままの状態で逃げまわる。そこで舟は鯨の体すれすれに近づいて鉆を撃つよ、手投げだね、すかさず舟に積んである土俵を海中に投げ入れる。土俵の中にはバラスが詰めてあって、これを網で舟べりからつるすようになっている。それをバラスをはかりながら手際よく10俵、15俵と海中に下げると舟に重みが加わってくる。逃げまわる鯨の体に刺った鉆は、ひっぱると羽根が広がって体にくいこんで抜けないようになっている。鉆の尻には網がついているから鯨は舟をひっぱる姿で、潮を掻いても、もぐっても苦しくなるばかりで浮き上って息をする、そこを二の槍、三の槍というように鉆を撃つのだ。鯨はなおも潮を掻く、体が思うように動かないからだんだん弱って

しましう。そのとき舟はどこまで引張られていったものか、下手すると島（天売・焼尻）まで持ってゆかれる。なにせ遠くへ行かないところで鯨を引いてこないことよ。せいぜい半里か1里ぐらいの所で鯨を始末せんとね。

鯨を引いてくるときかね、これは網で巻いたままの鯨を引いてくるのではなからうか、これは覚えていないなあ。

舟かね、舟はどんな舟かと問われても、磯はしっかり聞かなかつたけれどね、鯨の網をまくのだから、大分大きな舟でないかなあ、この時代は櫓を漕いでやるんだから。

（舟については『羽幌町史』の高丸キクの談話を写します。）

加賀の士族が捕鯨会社をつくって、じいさんが鯨捕りの船頭をしていた。当時羽幌の川北にガンケ場（捕鯨場）があり、若い者は大きな笹小屋に寝泊りし、西田たちの頭連中は、今の待合のあたりに住んでいた。ガンケ捕りには8隻の川崎船が使われ、4

隻が1組となった。その内2隻が網船で2隻は銚船だった、鯨は鯨を追って岸近くまできたが、潮ふきは、ちょうど帆を張った船のようであった。1日に5、6頭もとれたが、ずいぶん恐ろしいこともあったらしい。銚を打った鯨があばれて、島近くまで引かれたことがあった。鯨が弱のを待って引いて帰るときには、万国旗を立てて賑やかだった。肉は白肉だけとって塩漬にし、赤肉は捨てていた。

斉藤さんが鯨捕りを始めるといっても、経験者でないといけないことだからね、命をかけてやるのだもの、だからうちでやっていた加賀の捕鯨方法が、そっくり羽幌に持ち込まれたわけだね。

嶋元正武氏のお話は、私が初めて耳にすることばかりで、今から95年の昔、斉藤と共に羽幌にやってきた人たちのエピソードや、その子孫の話をも交えての物語りは尽きぬものがありました。

ここに斉藤の捕獲した鯨の種類と頭数を、友人渡辺渡の記憶により書き留めたものを記します(表1)。ただし斉藤にかかわる文献などと照合して、違いがあることをお断わりしておきます。

表1 斉藤知一氏捕鯨事跡

明 治	17 年	岩 内	1 頭	鯨種不明ナルモ長須ト承ル
	18 年	胆振・鷺別	1 頭	克
	19 年	有珠・門別	1 頭	サカマタ
	20 年	羽 幌	4 頭	座頭、克
	21 年	"	6 頭	同上
	22 年	"	22 頭	同上(大鯨30尺1頭) 座頭35尺1頭)
	23 年	"	36 頭 4 頭	サカマタ
	24 年	"	24 頭 8 頭	イルカ
	25 年	"	23 頭	
	26 年	"	18 頭	
	27 年	"	15 頭	

(注) 尚石狩国浜益時代の操業年代は不詳であるが、ここでの操業は2～3年で其の間14頭を捕獲した。郷里沿岸及び愛知県の分は記録なく不明である。大日本水産業株式会社時代のは省略。

聞くところによれば、浜益郡浜益村の郷土資料館には、「加賀の住人斉藤知一の捕獲による鯨骨」が展示されている由、思いもかけぬことでした。これは独立業となって浜益村に根拠地を置いたことの立証ともいえるもので、地元の方々のご努力のたまものと、有難く思う気持ちでいっぱいです。

北海道は、私にとって全くの処女地であったのです。

加賀の捕鯨法

北海道での取材を整理していて『日本捕鯨叢考』の中に、「加賀国捕鯨法」を見つけました。これには嶋元氏から聞いた捕鯨法が書いてあって驚きました。幸か不幸か、嶋元氏にお会いする前に、これを読んでいれば予備知識があって、もっと突込んだ質問ができた

であろうに思ったり、いや読んでいなかったからこそリアルな話を聞くことができたのだとも思い直して見るのです。嶋元氏が、しっかり聞かなかったとおっしゃる部分を補う意味で、「加賀国捕鯨法」を書き写します。

加賀国石川郡金石に行はるる捕鯨法を云んに漁船3艘各7人乗とし、鯨を海上に望むや直に船を出し、金時銚を投射し、綱(50尋)を銚身と船とに繋ぎ船は鯨の進退に従ふ是を魁船と云ふ、若し鯨の猛勢当り難きときは船中に備ふる沙苞(1苞20貫目)を40尋の縄に緊結し之を海に投沈して銚に換ふ、蓋し之を施すの機は突に1呼吸の間にあり、若し其機を誤れば覆船の患害あり、故に熟練の漁人にあらざれば其機に投ずる能はず、如此沙苞を投ずるときは自ら船重く鯨の疾走を妨ぐるを以て鯨体疲労し、其稍勢力の衰ふるに及んで他船來集し魁船の如く金時銚を投じ尙に刺銚を投ず、其多きもの40本に及ぶ而して曳銚(金時銚の大なるもの)2挺を潮吹孔の上部に刺し、綱を2艘の船に繋ぎ頭部に鉤を掛け1船の舳に結び共に之を曳て渚に至り、咽喉を刺して全く死するに至らしむ。……明治2年に至りて始め

て以上の捕鯨法開けたりと云ふ。

ところで私は前に書いた文に、「金石の木嬰長次郎が、明治2年2月鯨を捕獲したことが、加賀・能登・越中における捕鯨の嚆矢といわれる」と引用しましたが、しかし嶋元四郎がこの以前、安政年間から鯨を捕っていたこと、内灘では嶋元四郎家のみが捕鯨を行っていたとのことで、安政時代から10数年かけて積み重ねてきた捕鯨技術が、「加賀の捕鯨法」として書かれたものと思われれます。因に金石は、大昔から加賀国の重要な港として栄えた所で、内灘は金石の隣地にあります。従って鯨野郎ともいえる嶋元四郎と、木嬰長次郎の交流があったであろうことを考えると、一段と興味が湧いてくるのです。

斉藤の帝國水産時代以降の捕鯨方法は、加賀の捕鯨法で行われたか否かはまだ調べていませんが、私は羽幌の地を訪ねて斉藤の捕鯨法を知ると共に、足を運んで調べることの大切さを身にしみて感じたのです。

この夏、捕鯨に携わった先人たちと、捕えられた鯨族を慰霊するために、嶋元正武氏の手により羽幌の海に花束が供せられたのであります。

せ た し あ

11月16日付のIWCの回覧によると、来年2月27日から3月5日までケンブリッジに於て北太平洋マッコウクジラについての科学委員会特別会合が持たれる模様です。新聞報道その他で御存じの方も多いかと思いますが、北太平洋マッコウクジラについては先に行われたIWC年次会議において決定保留となっていたものです。先の科学委員会においては、Beddington-cookモデルとShirakihara-Tanakaモデルの2つの資源数理モデルで北太平洋マッコウクジラの資源評価が行われましたが、一致したコンセンサスを得られぬまま、時間切れとなりました。この2つのモデルについては特に理論的検討を行う小グループが持たれており、特別会合に於てもこの経過が大きな争点となるものと思われれます。

今年のIWCで日本に関係したキャッチクォータを

先日(11月2日)、スナメリ1頭が中央卸売市場へあがり、阿部宗明先生の御好意により入手することができました。聞くところによると、東京の市場にスナ

簡単に記しますと、北太平洋ではニタリクジラ507頭、沿岸ミンククジラが昨年度より始まったブロッククォータ(1980—1984年で、1,678頭、年間で421頭以下)の継続、南氷洋ミンククジラ3,577頭となっています。南氷洋ミンククジラについては本号より連載したIWC/IDCR調査によって資源状態がかなり明らかになりつつあり、すでに科学委員会内ではこの資源に対してはrobust stock(強固な資源)と理解されているのが現状の様です。本年科学委員会は、目視、標識、数理モデルの3手法を加味して、南半球全体として10,267頭を勧告致しましたが、本会議では米国の他の反対により、8,102頭が南半球全体枠となりました。IWC本会議の異常さはすでに知られているところですが、せめて科学委員会だけでも冷静な姿勢を保ってもらいたいものです。(加藤)

メリがあがるのは、珍しいそうです。その日は、朝からあいにくの大雨でしたが、雨=モマケズ大村所長、加藤さんらと築地へ向かいました。スナメリは雑で、

尾鰭は残念ながら切り落とされておりました。なんでも、ある芸術家が尾鰭の美しさに魅了されて持っていたそうです。(後日、この尾鰭は拝借してX線写真を撮影したのですが、切り口となった尾椎の部分は、骨が欠けていました)。このスナメリは、方法は不明ですが、小湊産であるとのことでした。さて、鯨研に運ばれたスナメリは、外部形態の計測と写真撮影が行なわれ、11月5日に、筑波大学の神谷先生、東大海洋研の粕谷先生、東大大学院生の伊藤さんらを迎えて解剖されました。外部プロポーションの計測部位と計測結果は以下の通りですが、詳細な結果と取りまとめは、機会を改めて報告されることと思います。(青木)

1. 体長(吻先端～尾鰭分岐点)	150.5cm
2. 吻先端～臍の中心	63.8
3. 吻先端～生殖器中央	81.9
4. 吻先端～肛門の中心	97.0
5. 吻先端～胸鰭前縁基部	28.3

6. 胸鰭前縁基部～先端(直線)	28.5cm
7. 胸鰭最大幅	9.4
8. 吻先端～背面隆起部前縁	34.8
9. 背面隆起部の長さ	79.6
10. 背面隆起部の最大高	2.0
11. 吻先端～背面隆起部後縁	110.6
12. 尾鰭最大幅	43.0
13. 吻先端～目の中心	10.9
14. 吻先端～噴気孔中心	10.8
15. 噴気孔～目の中心(左)	14.0
16. " (右)	13.2
17. 目の幅	1.4
18. 噴気孔の幅	2.6
19. 下顎先端～口角	6.9

※ 計測部位は Pilleri, G. and M. Gühr (1972) に従ったもののみを示した。